

日本英文学会中部支部
第67回大会プログラム

研究発表・シンポジウム要旨

日時：2015年10月17日(土)

会場：名古屋工業大学

(〒466-8555 名古屋市昭和区御器所町)

日本英文学会中部支部事務局

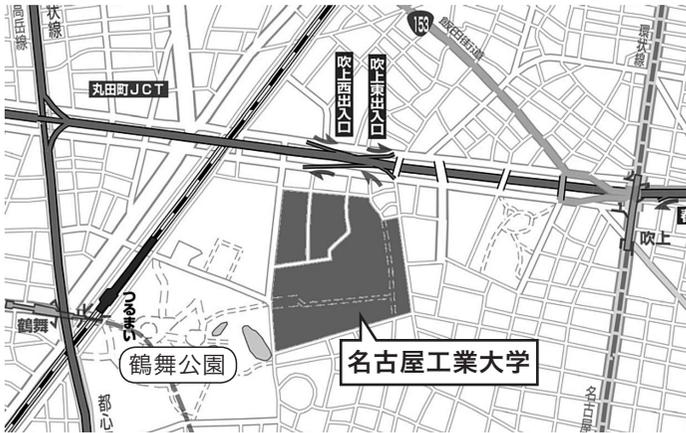
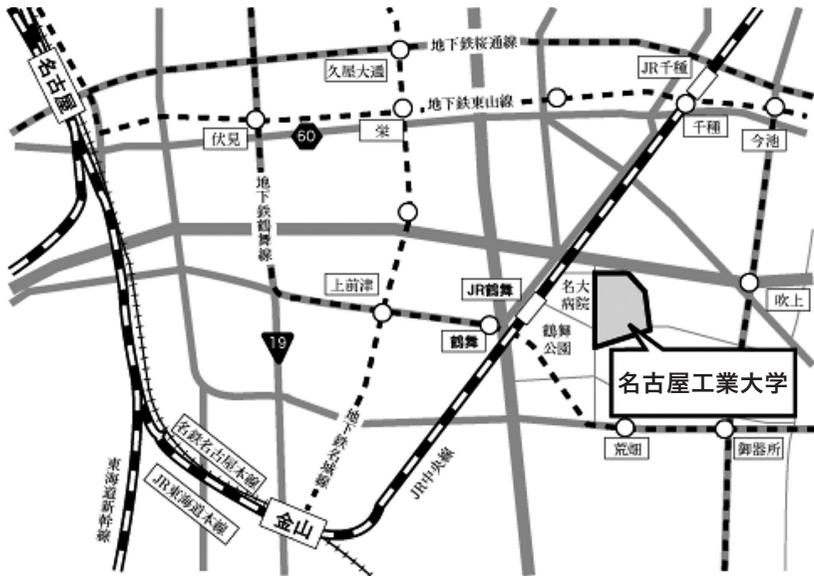
〒422-8529 静岡市駿河区大谷836
静岡大学教育学部 英語科共同研究室内

E-mail: chubu@elsj.org

HP: <http://www.elsj.org/chubu/>

名古屋工業大学 (御器所キャンパス) までの交通案内

交通アクセス



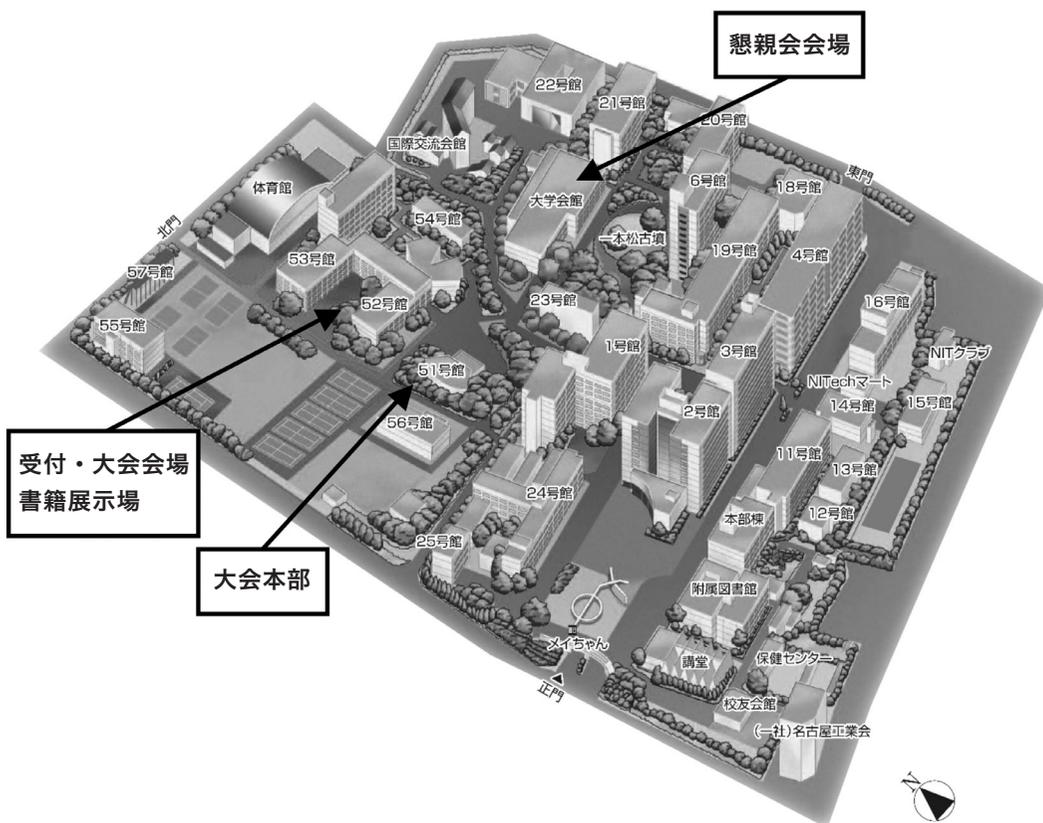
■ JR東海
中央本線 鶴舞駅下車
(名大病院口から東へ約400m)

■ 地下鉄
鶴舞線 鶴舞駅下車
(4番出口から東へ約500m)
桜通線 吹上駅下車
(5番出口から西へ約900m)

■ 市バス
栄18 名大病院下車
(東へ約200m)
昭和巡回 名大病院下車
(東へ約200m)
※「栄18」「昭和巡回」は市バスの系統名です。



キャンパスマップ



開催校からのお知らせ

【ご入構について】

来客用の駐車場がありませんので、自動車でのご来校はご遠慮いただき、公共交通機関をご利用ください。

【食事場所について】

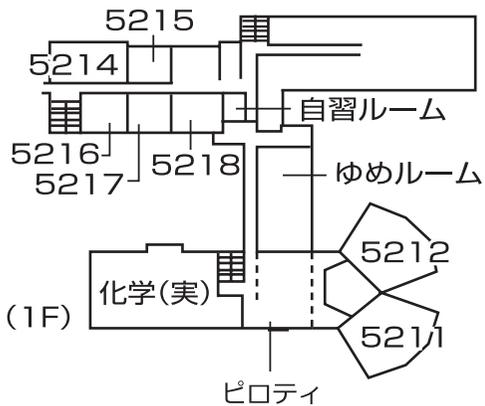
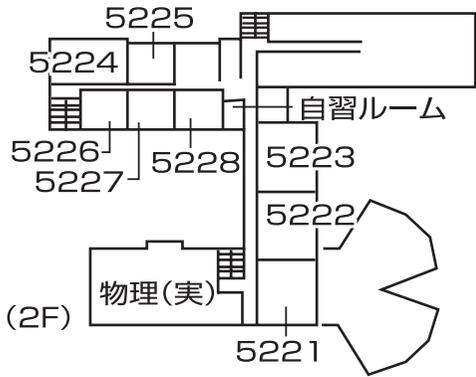
大学内の食堂については、大会会館2階カフェテリアが11時30分から13時30分まで営業を予定しております。また、大学北門より徒歩5分のところにイオンタウン千種があり、フードコートを含む飲食店がございますのでそちらもご利用いただけます。

【周辺のコンビニ情報など】

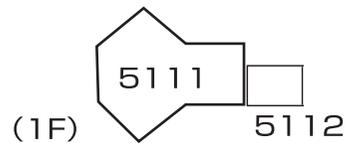
14号館横にある生協購買部(Nitech マート店)が10時から14時まで営業を予定しております。自動販売機は北門入口、52号館ラウンジ入口、大会会館横にあります。

教室案内

52号館・53号館



51号館



受付：52号館ピロティ

開会式・総会・閉会式：52号館5211教室

シンポジウム：5211教室、5212教室、5214教室

研究発表：5214教室、5215教室、5217教室、5218教室

講師・発表者・司会者控室：53号館5216教室

会員控室：52号館ゆめルーム

書籍展示場：52号館ピロティ

理事会、大会本部：51号館5112会議室

日本英文学会中部支部第67回大会プログラム

日時：2015年10月17日(土)

場所：名古屋工業大学(名古屋市昭和区御器所町)

大会受付 12:20より (52号館ピロティ)

開会式 12:50～13:00 (52号館5211教室)

開会の辞 日本英文学会中部支部長 内田 恵
 開催校挨拶 名古屋工業大学学長 鶴飼 裕之

総会 13:00～13:30 (52号館5211教室)

シンポジウム 13:40～15:50

第1室(比較文学) 52号館5211教室

『比較文化的な観点から戦後日本のアメリカ体験を考える：

佐伯彰一、大橋健三郎、亀井俊介の場合』

司会・講師 大貫 徹(名古屋工業大学教授)
 講師 有為楠 泉(名古屋工業大学名誉教授)
 藤岡 伸子(名古屋工業大学教授)

第2室(アメリカ文学) 52号館5212教室

『地誌／地質から読み解くアメリカ詩——ディキンソンからオルスンへ』

司会・講師 金澤 淳子(早稲田大学非常勤講師)
 講師 平野 順雄(椙山女学園大学教授)
 江田 孝臣(早稲田大学教授)

第3室(英語学) 52号館5214教室

『英語形容詞の形態・統語・意味』

司会・講師 柳 朋宏(中部大学准教授)
 講師 金澤 俊吾(高知県立大学准教授)
 堀田 隆一(慶應義塾大学教授)

研究発表 第1発表 16:00～16:25 第2発表 16:30～16:55

第3発表 17:00～17:25 第4発表 17:30～17:55

第1室 52号館5217教室(英米文学) 16:00～17:25

第2室 52号館5218教室(英米文学) 16:00～17:25

第3室 53号館5214教室(英語学) 16:00～17:55

第4室 53号館5215教室(英語学) 16:00～17:55

閉会式 18:00～18:10 (52号館5211教室)

開会の辞 日本英文学会中部副支部長 吉田 江依子

懇親会 18:30～20:00 大学会館1階 大食堂(会費4000円)

研究発表一覧

第1室(英米文学) 52号館5217教室

司会 小田原 諠子(中京大学教授)

1. *Dreams and Ecstasy in The Faerie Queene*
Chen Lu (名古屋大学大学院)

司会 楚輪 松人(金城学院大学教授)

2. *Our Mutual Friend*における父子の和解
近藤 浩(愛知学院大学准教授)

3. 太平洋世界の情報発信者としてのR. L. ス
ティーヴンソン
山本 卓(金沢大学教授)

第2室(英米文学) 52号館5218教室

司会 丸山 修(静岡大学教授)

1. *The Paper Men*—メタフィクションの迷宮—
高橋 公雄(愛知学院大学大学院)
2. Evelyn Waughの*Sword of Honour*における対
話の可能性
有為楠 香(名城大学非常勤講師)

司会 川村 亜樹(愛知大学准教授)

3. ステレオタイプを通して他者理解へ——
*Sombrero Fallout*における日本人女性と暴動
菅井 大地(名古屋大学大学院)

第3室(英語学) 53号館5214教室

司会 鈴木 達也(南山大学教授)

1. 英語書記体系論試論：接辞付加された語の
綴りを例に
大名 力(名古屋大学教授)

2. 英語における遊離数量詞の統語的分析
夏 思洋(名古屋大学大学院)

司会 中村 太一(福井大学准教授)

3. 英語史における軽名詞句転移の消失について
バイ チゴチ(名古屋大学大学院)
4. 同格的同族目的語の統語的扱いをめぐる：
コーパス研究の視点から
澤野 亜美(静岡大学特任助教)
小町 将之(静岡大学准教授)

第4室(英語学) 53号館5215教室

司会 守屋 哲治(金沢大学教授)

1. 英語と日本語のテキストと語り
—「同化」と「異化」の観点から—
向井 理恵(金沢大学大学院)
2. There構文の派生に関する一考察——認知的
的アプローチと機能的アプローチの接点
新妻 明子(常葉大学短期大学部講師)

司会 大村 光弘(静岡大学教授)

3. 英語使役動詞の棲み分けから見る*have*使役
文の意味解釈
藤原 隆史(松商学園高校教諭・信州大学大学院)
4. 前置詞byと手段の*de*に対応する英語表現
加藤 鉦三(信州大学教授)
Sean Collin Mehmet(信州大学准教授)

シンポジウム・要旨

第1室(比較文学) 52号館5211教室

比較文化的な観点から戦後日本のアメリカ体験を考える：
佐伯彰一、大橋健三郎、亀井俊介の場合

司会・講師	名古屋工業大学教授	大 貫 徹
講師	名古屋工業大学名誉教授	有為楠 泉
講師	名古屋工業大学教授	藤 岡 伸 子

「1853年のペリー来航以来、日本人はアメリカの大衆文化を非常によく受け入れてきた」と記したのは『サーカスが来た!』の亀井俊介である。亀井によれば、アメリカ文化流入は開国以来ずっと途切れることなく続いており、先の戦争もその流れを一時的にとどめていたに過ぎないとのことである。先の戦争とは、したがって、単なる堰に過ぎないというのが1932年生まれの亀井の判断である。これに対し、「文学部に入って、アメリカ文学専攻と思いきめた年の暮れに、思いがけず戦争が起って、自分のえらび取った生涯の専攻の対象が、一瞬にして敵国の文学となり変ってしま(った)」(『日米関係のなかの文学』から引用)のが1922年生まれの佐伯彰一である。一兵士として実際に戦場でアメリカ兵と戦わなければならないという意味も込めてここでは「敵国」が使われている。この後、佐伯は大橋健三郎(1919年生まれ)と江田島の海軍兵学校で思わぬ出会いをする。そして二人は共に、日本が被占領時期の1950年にアメリカに留学する。その際、朝鮮戦争が勃発したこともあり、二人は軍用飛行機でアメリカに赴くことになるのだが、途中で先の戦争の爪痕を次々に見る羽目にもなり、「敵国」だったアメリカを強く意識せざるをえなかった。とはいえ、その度合いは佐伯の方が強く、大橋はむしろ急成長する超大国アメリカにどのように向かい合おうかという思いの方が強かったかもしれない。だがいずれにしろ二人にとってアメリカは戦争と密接に結びついている。これに対し、亀井はアメリカ兵がジープに乗ってやって来る姿に強い解放感を感じていた。僅か10年違いであるが、そこには大きな違いがある。今回のシンポジウムでは、後に名をなす三人の若き日の「アメリカ」体験に焦点をあて、それが彼らの文学・文化研究にどのような意味を持ったのか、これについて比較文化的な観点から考えてみたい。

日米関係のなかの佐伯彰一

大 貫 徹

佐伯彰一が昭和59年(1984年)に刊行した『日米関係のなかの文学』を中心に佐伯にとってのアメリカ体験について論じたい。その際のキーワードは「緊張感」である。今から70年以上の前の話である。知的能力も高く語学力にも秀でた19歳の英文科学生がいた。その学生は卒論の対象に、正統的なイギリス文学ではなく、アメリカ文学、それも未知の作家メルヴィルを選んだ。若者らしい野望というべきだろう。ところがここで人生の逆転が生じる。専攻として選んだアメリカが昭和16年(1941年)12月に敵国になってしまったのである。実際には軽い気持で何気なく「アメリカ文学専攻」を選択したに過ぎないとしても、この瞬間、自分がそれを主体的に選択したのだと言わざるを得ない事態が生じてしまったのである。このときから佐伯には強い緊張感が漂いはじめる。こ

の緊張感は敗戦後も続く。日本が被占領国であった昭和25年(1950年)、若き佐伯はガリオア留学生としてアメリカに1年間赴くのだが、このとき再び先の戦争を実感する出来事に遭遇する。日本においては敵国の文学を選択したことの緊張感、アメリカにおいては日本人であることの緊張感である。こうした緊張こそが後の文藝評論家佐伯彰一を形作ったのではないかと考えている。

大橋健三郎とアメリカ深南部(ディープ・サウス)

有為楠 泉

日本アメリカ文学会の創立に尽力し、第四代会長、また日本ウィリアム・フォークナー協会初代会長となり、夥しい研究書・評論・翻訳を残すと同時に多くの後継者を育てた大橋健三郎のアメリカ体験は、アメリカ深南部(ディープ・サウス)の土地との出会いと深く関わる。京都に生まれ、東京、仙台と、日本の三都での勉学と生活体験、生来の文芸嗜好、名立たる英文学者らによる薫陶を通して、戦時下、大橋の文学への関心は一層強まった。海軍兵学校で予備士官として教官を務めた間も文学志向は一貫し、戦後は大学で教える傍ら、井上光晴ら文人との交流を深める。ガリオア留学生として早々にアメリカに渡った際の南部ルイジアナ州(チュレーン大学)への配属は、結果的に見て、その後の大橋のアメリカ文学研究、および日本の文学の考察に深く関連したと思われる。シンポジウムでは、この関連について、新批評の影響、1930年代の小説への関心、フォークナーへの傾倒、日本人の心のルーツの探究等をキーワードにして考えてみたい。

亀井俊介がアメリカ大衆文化に発見した「自由」と「ライフ」のゆくえ

藤岡 伸子

『サーカスが来た！ - アメリカ大衆文化覚書』(1976年)は、亀井俊介の仕事において一つの画期をなした快作である。翌年には日本エッセイストクラブ賞を受賞したが、正統派の学者がこの賞を受賞すること自体異例であった。また1980年に文春文庫に入れられるや初刷5万部を短期間に売り切り、1992年には岩波同時代ライブラリーにおさめられ、さらに2013年には平凡社ライブラリーの一冊として新たな読者を獲得している。日本学士院賞を受賞した『近代文学におけるホイットマンの運命』(1970年)が、その精緻さで高く評価された時、亀井には文学・文化の研究をより自由に行い、またその成果を自由な表現で発表したいという強い思いがすでにあったという。その思いの原点には、終戦とともに故郷の小都市に颯爽と現れたジープが象徴する開放的で活き活きとしたアメリカの像があったという。こうした亀井の新境地は、彼が1973年の8ヶ月間を過ごしたニューヨーク州ポーキープシーやニューメキシコ州ラスクルーセスなど、言わば「辺境」で得た、生気溢れる体験とそれを裏打ちすべくなされた研究の複合的な成果に他ならない。今回は、亀井がアメリカ大衆文化の中に発見し、魅了され、以後追求し続ける「自由」と「ライフ」の本質について、『サーカスが来た！』を中心に論じるとともに、その視点が『アメリカ文学史講義』でどのように展開され、さらには『有島武郎』に代表されるような日本文学・文化研究とどう響き合うのかをも確認していきたい。

第2室(アメリカ文学) 52号館5212教室

地誌/地質から読み解くアメリカ詩——ディキンソンからオルスンへ

司会・講師	早稲田大学非常勤講師	金澤淳子
講師	椛山女学園大学教授	平野順雄
講師	早稲田大学教授	江田孝臣

社会、文化、経済のあらゆる面でグローバル化を強引に押し進めてきたアメリカ。一方でアメリカはその地域性によって立つところもまた大きい。様々なレベルにおいて地域性と普遍性、内向性と外向性の両面がせめぎ合うアメリカの諸相を文学、特に詩において見出してみようというのが、このシンポジウムの趣旨となる。19世紀ニュー・イングランドの西部コネティカット・ヴァレーのアマストで暮らし、詩を書いたエミリ・ディキンソン(1830-1886)。ディキンソンから80年後、やはりニュー・イングランドに生まれ、先祖ゆかりの沿岸部グロスターを原風景として詩を書いたチャールズ・オルスン(1910-1970)。19世紀と20世紀の時代的な隔たり、生きた環境の違いがありながらもふたりに共通するのは、近代化一辺倒の同時代の社会に対して違和感を持ち続けた姿勢である。ふたりの詩における地域性を探るうえで、ニュー・イングランドの地誌そして地質という要素を意識しながら読んでいく。地誌を人間の営みを反映させた土地の記録として捉えるならば、地質は人間の有史以前に遡る土地の営みの記録といえるのではないか。今回のシンポジウムではディキンソンからオルスンへと連なるその地誌的な視野から出発し、地質的な視野へと拡大していくことで、「地域性」の持つ想像的可能性を掘り起こしてみたい。そのうえで、21世紀の日本の読者にふたりの詩がいかに「普遍的に」響く要素があるのかということを考えることになる。

エミリ・ディキンソンと天体観測

金澤淳子

1859年、奴隷制反対論者ジョン・ブラウンが実行使でハーパーズフェリー連邦武器庫を襲撃・占拠し、死刑に処せられる出来事が起き、同時代の社会に大きな衝撃を与えた。この後、アメリカは南北戦争へと突き進んでいくことになる。この事件が当時の文学者に与えた影響も大きく、メルヴィルやホイットマンはそれぞれブラウンの処刑を流星に結びつけて詩を書き、南北戦争の予兆としている。因みに1859年にオーロラや彗星などの天体観測が何回か報告されている。ディキンソンの場合、ブラウンに特定できないものの、やはり「殉教者」と流星とを重ねた詩を書いている。ブラウンの事件にディキンソンは不穏な空気を嗅ぎ取り、彼女の内なる何か、囚らずも他の詩人たちと同様のイメージを辿ることになったといえよう。戦争への暗雲立ち込める歴史的転換期、ニュー・イングランドに生きたディキンソンにとって、天体現象がいかに詩作に結びついているかを考察する。

オルスン——マサチューセッツ州グロスターの地誌と地質

平野順雄

マサチューセッツ州ウースター生まれのオルスは、同州アン岬のグロスターで毎年夏を過ごした。オルスの「都市(ポリス)」グロスターは、アメリカの始源の地だった。新大陸に漁業プランテーションを構築するべく、イギリスのドーチェスター・カンパニーがこの地に漁師を入植させたのである。

しかし、プリマスに入植したピューリタンの目的は、政教一致の国家を樹立することであった。

1620年代の始め、利害を異にする両者は激しく対立する。その様子をオルスン作『マクシマス詩篇』(1983)によって概観する。

次に、政治的・宗教的・経済的対立が生じる17世紀より、はるか以前、今から1万年前に氷河期が終わるころの地質が、どのように描かれているかを検討する。商業主義から初期資本主義へ傾斜して行くプリマス住民と、漁業に従事するグロスター住民との対立に、地質学はどのような視座を与えるだろう。

エミリー・ディキンソンと氷河期

江田孝臣

エミリー・ディキンソンの1863年春作の“The Winters are so short -” (F 532 / J 403) は、一人称の語り手を人間と仮定して読むと、どうにも解釈に窮してしまう作品である。そこで、語り手が人間であるという思い込みを捨て去って、作品中に散りばめられた複数の手掛りから理詰めを考え直してみる。すると、語り手を、最終氷河期を種鞘のなかで生き延びた樹齢何千年の樹木か、あるいはその霊であると仮定すれば、それまで不可解だった細部がひとつの意味に向って収斂してゆくことに気づく。すなわち、この詩は樹木の口を借りて、遠い昔に起きた氷河期の終焉について語っているのである。発表の後半では、この詩の材源がアマースト・アカデミー時代にディキンソンが使った地質学の教科書からとられていることを立証し、ディキンソンの地質学的想像力の特質について考える。

第3室(英語学) 52号館5214教室

英語形容詞の形態・統語・意味

司会・講師	中部大学准教授	柳 朋 宏
講師	高知県立大学准教授	金 澤 俊 吾
講師	慶應義塾大学教授	堀 田 隆 一

本シンポジウムでは英語の形容詞に焦点をあて、形態・統語・意味の側面から通時的あるいは共時的に分析することを目的とする。形容詞は動詞と同じように述部として用いられるという点で「主役」としての役割を担うことができる。その一方で、文の主要要素である名詞を修飾するという、いわば「脇役」的な役割を果たすこともある。このように使用範囲が広い一方で、文の主要要素となる動詞や名詞に比べると、形容詞に関する分析はあまり多くないと思われる。たとえば、言語変化に関する研究では動詞屈折の豊かさと動詞移動との関連性や動詞と目的語の語順の変化などが重要な争点となっているが、形容詞屈折と移動の可能性や形容詞と目的語の語順についてはほとんど研究がなされていない。

本シンポジウムでは、各講師が専門とする領域を切り口とし、古英語から現代英語にわたる形容詞の形態的・統語的・意味の特徴について論じる。具体的に取り上げるテーマは、現代英語における形容詞が関与する修飾関係の「ねじれ」、中英語期における形容詞屈折の衰退と残存による言語体系への影響、古英語名詞句内での形容詞の分布と統語位置である。このように講師によって取り上げる現象も分析方法も異なるが、広く英語の形容詞について論じ、フロアとの意見交換も

交えながら、「主役」も「脇役」も演じられる英語形容詞の諸特徴を探求していきたい。

現代英語における形容詞の事象修飾とその意味的特徴について

金澤 俊吾

形容詞、名詞から構成される名詞句が、動詞によって表される事象を修飾する場合がある。たとえば、形容詞を伴う名詞句 *sip* が、文中の様々な位置に生起し、動作の様態を表すことができる。

動作の様態は、当該名詞句が動詞の目的語位置に生起し同族目的語構文を形成することによって表される場合もあれば (*sip a solitary sip*)、前置詞句内に生起し動作の様態を表される場合もある (*drink their lemonade in slow sips*)。また、文末に生起することで表される場合もあれば (*She drank from the glass, a prolonged but dainty sip.*)、名詞句単体で表される場合もある (*She drank brandy. A slow sip at a time.*)。

本発表では、現代英語において形容詞が名詞との間にこの種の修飾関係を構築する際、どのような意味的特徴がみられるかについて検証する。その上で、当該名詞句が事象を修飾すると一口に言っても、生起する構文形式が異なるとその修飾の仕方に違いがみられることを示す。

中英語における形容詞屈折の衰退とその(社会)言語学的余波

堀田 隆一

後期古英語から中英語期にかけて進行していた屈折語尾の弱化・消失の過程は、名詞や動詞のみならず、形容詞にも著しく観察される。形容詞屈折には性、数、格、定・不定の文法カテゴリーが関与していたが、初期中英語のあいだに性と格はほぼ関与しなくなり、数と定・不定も後期中英語までに概ね衰退した。しかし、後者2カテゴリーは互いに関連しながら、Chaucer の一部の写本テキストなどに一定の痕跡を残しているのも事実である。本発表では、まず初期中英語における形容詞屈折の衰退過程を概観する。続いて、後期中英語にまだ残っていた屈折語尾の分布を、主として後期中英語のテキストにおいて調査する。また、その結果に基づいて、形容詞屈折の衰退と残存が及ぼした言語体系への影響と、社会言語学的な含蓄について議論する。

古英語の名詞句内における形容詞の分布と統語位置

柳 朋宏

本発表では古英語の名詞句内に生起する形容詞の語順と統語位置について、コーパスから得られたデータに基づいて論じる。Mitchell (1985: §173) によれば、*such pure red gold* のように接続詞なしで2つの形容詞が名詞に先行する事例は現代英語程一般的ではないが *monige scarpe isene næglas* ‘many sharp iron nails’ のように古英語においても皆無ではない。また接続詞 *and* で等位接続された形容詞群が名詞に先行することもあれば、*hit is gesceaft brosnienlic and awendedlic* ‘it is a corruptible and changeable creature’ のように名詞に後続する事例も存在する。さらに2つの形容詞のうち1つが名詞に先行し1つが後続する *niwne steorran beorhtne* ‘a new bright star’ のような事例も観察される。このような事例において、2つの形容詞間の語順や名詞句内での形容詞の分布を決定する要因について考察する。また、(初期)中英語の名詞句内において形容詞の分布と生起位置がどのように変化したかについても論じる予定である。

研究発表・要旨

第1室(英米文学) 52号館5217教室

司会 中京大学教授 小田原 謠 子

第1発表

Dreams and Ecstasy in *The Faerie Queene*

名古屋大学大学院 CHEN Lu

This presentation will focus on early modern “ecstasy” particularly in the form of dreams in Edmund Spenser’s *The Faerie Queene* (1590, 1596).

In John Donne’s “Exstasie” (1633), a fundamental nature of the state of ecstasy is revealed, which is the detached occurrence of body and spirit. Such condition happens to the Red Cross Knight in Book I of *The Faerie Queene* in the form of a false dream, which is one of the essential dream patterns in this work. In his following adventures, he loses himself and tends to commit suicide. He does not set his final goal until the end of Book I. In this work, if the establishment of identity should be reached by achieving a certain kind of mission, then the obstacles of the Red Cross Knight is his unstable identity caused by “ecstasy”. The purpose of this presentation is to interpret dreams as ecstasy in *The Faerie Queene* from the historical-metaphysical viewpoint through the Red Cross Knight’s journey of searching for his identity.

司会 金城学院大学教授 楚 輪 松 人

第2発表

*Our Mutual Friend*における父子の和解

愛知学院大学准教授 近 藤 浩

Charles Dickens (1812–70) の *Our Mutual Friend* (1864–5) は、父と子(息子)の和解を描いた作品と見ることもできるのではないか。John Harmon と亡父(以後、老Harmonと記す)との間で和解が成り立ったことが、第4部第13章で示唆される。そこでは、Johnの妻Bellaが幼子を抱いている姿を見て、Boffin夫妻は老Harmonの霊がついに安らぎを見いだしたようだとの思いを分かち合っているのだ。この感動的な場面が物語の終盤にあることを考慮すれば、Boffin夫妻の感想はJohnと老Harmonの最終的な関係を示している可能性が高い。また、父と対立した息子が、仮の名John Rokesmithを捨て、父と同じJohn Harmonの名を再び名乗るという事実も、父子関係の修復を示している。

Dickens作品では通常、父と息子の関係は発展しない。父と息子の和解、及びそこに至るプロセスを追及することによって、Dickensの晩年の父子観を探ってみたい。

第3発表

太平洋世界の情報発信者としてのR. L. スティーヴンソン

金沢大学教授 山 本 卓

スティーヴンソンは晩年をサモアで過ごし、そこでの見聞を題材に数編の物語を書いた。しかし

ながら、それらの作品の多くは20世紀終盤のポストコロニアリズム批評の出現まで、ほとんど触れられなかった。その一方で、現地における彼の影響力は看過できないものがある。サモア出身の作家、アルバート・ウェントやシア・フィジェルはスティーヴンソンの存在をきわめて強く意識しており、作品の中で彼に言及する。そこでは、ときには郷土が誇るべき文芸作家として、また別の機会では白人の植民地主義者として、両義的に描出される。本発表では、こうした現代太平洋作家における対照的な評価が、スティーヴンソンが試みた太平洋世界の「生の」情報発信と深く関わっていることを検証する。

第2室(英米文学) 52号館5218教室

司会 静岡大学教授 丸山 修

第1発表

The Paper Men—メタフィクションの迷宮—

愛知学院大学大学院 高橋 公雄

William Golding 晩年のこの作品の語り手Barclayにはアルコール中毒によるブラックアウトがしばしば起こる。語り手である老獪な作家が事実をストレートに記述するわけではないので、晦渋、欺瞞、幻視等の介入の可能性がある。彼の経験した悪夢や、軽い脳卒中による意識障害の期間の記述も含まれる。これは日誌や旅行記、覚書・メモ、伝記のための記録、あるいは自伝の下書きとも言える。要するに、メタフィクションの要素満載のテキストである。

The Paper Men は、あたかもメビウスの輪のように、冒頭の間から紆余曲折を経てまた冒頭の間へと繋がるが、実際は迷宮を行きつ戻りつして出口を探るという説明が当を得ているのかもしれない。Goldingはメタフィクショナルな要素を周到に配置することによって、これを一個の作品に仕立て上げている。この研究発表では、その迷宮に分け入り、作者のグランドデザインとは何かを探究する。

第2発表

Evelyn Waughの *Sword of Honour* における対話の可能性

名城大学(他)非常勤講師 有為楠 香

Evelyn Waughの大戦三部作 *Sword of Honour* (1965) における、紙媒体によるコミュニケーションと肉声コミュニケーションとの違い、またその違いにWaughの込めたねらいについて分析する。紙媒体のコミュニケーションの例には書簡・電報・新聞を取り上げる一方、肉声コミュニケーションの例には主人公Guyとユダヤ人難民の女性の終盤の会話を中心に考察する。第二次大戦最大の被差別民であるユダヤ人の言葉が、英国軍人Guyの名誉に関わる幻想を砕き、真の使命を自覚させて物語が終わるといふ展開には、声による直接的対話へのWaughの信頼が浮かび上がる。反対に紙媒体のコミュニケーションが悉く軍と関係し、人々の希望や期待を裏切る様には、戦争と軍隊という官僚機構との結合にWaughが抱いた懐疑が読み取れる。その上で、最終的には言葉の重みが運命を決定するというWaughのカトリックとしての思いを明らかにする。

第3発表

ステレオタイプを通して他者理解へ——*Sombrero Fallout*における日本人女性と暴動

名古屋大学大学院 菅 井 大 地

リチャード・ブローティガン (Richard Brautigan) の小説 *Sombrero Fallout* (1976) は、ブローティガンの日本に対する眼差しが含まれる。この作品では、かつての恋人であった日本人女性 Yukiko を回想する American humorist の物語と、ソムブレロの落下を発端に暴動が発生する様を描く物語とが並置される。日本人女性の描写と、暴動の描写を並置することで、ブローティガンは他者理解のあり方を問い直していると考えられる。彼の描くステレオタイプは、Homi K. Bhabha の言う西洋の権力の不安を抑圧するものではなく、ステレオタイプを通して他者理解を模索する姿勢を提示する。本発表では、日本人女性に関するステレオタイプとソムブレロに関する物語との関係性に焦点を当て、ブローティガンのステレオタイプは肯定的なものであり、他者への歩み寄りを試みるものであることを考察する。

第3室(英語学) 53号館5214教室

司会 南山大学教授 鈴 木 達 也

第1発表

英語書記体系論試論：接辞付加された語の綴りを例に

名古屋大学教授 大 名 力

例えば、study - studied - studying, tie-tying などに見られる i と y の交替、sitting-visiting, setting-heading, leg-egg, pad-add などに見られる単子音字・重子音字の違い、mat-mate, low-owe, plays-studies などに見られる黙字 e の有無などは、英語の基礎を学んだ者であれば誰でも知っていることではあるが、そうになっている理由を説明するのは意外と難しい。本発表では、接辞付加された語と基本形(動詞の原形、名詞の単数形など)の綴りを例に、(a) 強勢付き単母音字は開音節では長音、閉音節では短音となる、(b) 内容語は3文字以上で綴る、(c) i, u は語末・母音字間では使用できない、(d) i の連続は避ける、などの基本的な規則・制約を基に英語の綴りの仕組みについて説明し、さらに、これらの規則・制約もより基本的な規則・原理・制約から派生するものであることを示す。

第2発表

英語における遊離数量詞の統語的分析

名古屋大学大学院 夏 思 洋

本発表では、修飾するホスト NP から離れた位置に生じる数量詞、すなわち遊離数量詞について、極小主義理論の枠組みにおいて統語的分析を提案する。まず、遊離数量詞が副詞的要素として述部の付加位置に生成されるとする分析に基づき (cf. Bobaljik (1995))、遊離数量詞と照応形の類似性を手がかりとして、遊離数量詞はホスト NP と共に goal として、同一フェイズ内で機能主要部、特に T との多重一致の下で認可されると仮定する。この仮定は、アイスランド語や古英語等の言語において、遊離数量詞がホスト NP と形態的に一致するという事実から支持される。そして、この認可条件を用いれば、英語における遊離数量詞の分布が正しく説明されると主張する。

第3発表

英語史における軽名詞句転移の消失について

名古屋大学大学院 バイ チゴチ

本発表では、初期英語において *he brougt wiþ him peple* (CMBRUT3, 88.2667) のような軽名詞句転移が存在していた事実を提示し、それが消失した原因を明らかにする。コーパス調査に基づき、軽名詞句転移は新情報を表す目的語を文末の焦点位置に移動する操作であり、初期英語では Gundel (1998) の Given Before New Principle (GBNP) が名詞句転移の十分条件であったため、軽名詞句転移が可能であったと主張する。そして、GBNP と重名詞句転移を駆動する Wasow (2002) の Principle of End Weigh (PEW) は互いに競合していたが、当初から有力であった PEW が後の段階においてさらに有力となった、つまり、それが名詞句転移の必要条件となったため、GBNP の役割が減少し、最終的に十分条件ではなくなったと主張する。すなわち、軽名詞句転移の消失は PEW を含む文法と GBNP を含む文法の競合の帰結であると主張する。また、この主張が Pintzuk and Taylor (2012) の分析によって支持されることを論じる。

第4発表

同格的同族目的語の統語的扱いをめぐる：コーパス研究の視点から

静岡大学特任助教 澤野 亜美
静岡大学准教授 小町 将之

本発表では、いわゆる同族目的語 (CO) 構文が一様の構造を有するものではなく、動詞のタイプによって異なる構造を仮定すべきことを論じる。Nakajima (2006) は非対格性仮説に基づき、CO を取るのが非対格動詞の場合は、付加詞としてしか生じ得ないことを論じた。発表者らはさらに、Jespersen (1927) に指摘される、カンマやダッシュによって CO が区切られる例 (同格的同族目的語、ACO) に注目し、BNC と COCA によりコーパス調査を行ったが、非対格動詞と共起する ACO は一例も観察されなかった。

このことは、非対格動詞における CO には付加詞の可能性しかないことと、ACO が付加詞的な振舞いをするを合わせて考えると奇妙である。発表者らは、これらに整合的な説明を与えるため、付加詞としての CO にも 2 タイプあり、両者の違いも統語構造に反映されていると提案し、その帰結を論じる。

第4室 (英語学) 53号館5215教室

司会 金沢大学教授 守屋 哲治

第1発表

英語と日本語のテキストと語り—「同化」と「異化」の観点から—

金沢大学大学院 向井 理恵

本発表では、Langacker (2009) の layering と anchoring、Langacker (to appear) の Baseline/Elaboration organization の概念をもとに、話者と叙述内容との関わりについて、日英比較を行う。英語は文の中心に、主語と時制を帯びた動詞からなる Existential Core (≡ CORE) を持ち、それを

詳述化する層が包み込み、descriptiveな層から interactive / discursiveな層へと展開していく fractal な構造を有している。descriptiveなレベルには、仮想の概念化者が関わり、interactive / discursiveなレベルには実際の話し手が関わる。一方、Existential Coreをもたない日本語は、外側の interactive / discursiveなレベルを基本とし、仮想の概念化者は想定していないように思われる。以上のことを、具体的な言語データをもとに示す。そしてこの概念化者のあり方が、文字を声に起こす語りにおける「同化」と「異化」の仕方や質にも影響を与えていると考え、この点についても考察を加える。

第2発表

There構文の派生に関する一考察——認知的アプローチと機能的アプローチの接点

常葉大学短期大学部講師 新妻明子

本発表の目的は、there構文の派生において、様々なタイプのthere構文に関する有機的なつながりとそのプロセスに関して認知文法論と機能文法論の両側面から考察し、分析することである。認知的アプローチによると、存在的there構文はメタファーによる直示的there構文からの拡張であり、それぞれの下位構文が派生して1つのカテゴリーを形成すると分析されている。一方、機能文法論では、there構文は意味上の主語の左側の要素が、話し手にとって観察可能な存在か出現を表すと解釈される場合にのみ適格となると提案している。存在的there構文のthereがメンタル・スペースを指示すると主張する認知的アプローチと機能構文論の接点を探り、虚辞itではなくthereである理由や、構文の派生について統合的に考察する。

司会 静岡大学教授 大村光弘

第3発表

英語使役動詞の棲み分けから見る have使役文の意味解釈

信州大学大学院／松商学園高等学校教諭 藤原隆史

英語使役動詞には *make*, *have*, *let*, *get* 等があるが、その中でも *have* についてはその後続する要素が多様である上に、意味解釈も非常に幅広い(安藤2005)。しかも学習者にとって少なくとも以下の2点の問題をはらむ。① *have* は意味解釈に揺れがある。例えば *John had his hair cut by Mary.* (Washio 1993: 49) という文では「使役」と「受身」を弁別しにくい。② ほぼ同じ意味を表すといわれる *have* 使役と *get* 使役の用法で、*have* が許容されない場合がある。Be careful not to get [*have] yourself burned. (ジーニアス英和辞典第4版)

本発表では、Fujiwara (2015) で示された *have* 文の意味誘導条件をさらに発展させる形で示し、*have* 文の解釈が形式的側面のみならず意味論的・語用論的にも左右されることを他の使役動詞との比較の中で示す。

第4発表

前置詞 by と手段のデに対応する英語表現

信州大学教授 加藤 鉦 三
信州大学准教授 Sean Collin MEHMET

日本語のデ格の英訳は前置詞選択課題である。しかし手段のデの場合には、他のデの場合と違って、手段のデ専用として見ることができ *by* が優先的に使われるため、前置詞選択よりも、「そば」

のbyがなぜ手段専用の前置詞として使えるのか、という問題の方がより興味深い。さらに手段の用法では、byには「抽象化されていること」という制約が課せられる、ということは周知の事実であるが、ではなぜそのような制約が課せられるのか、も非常に興味深い。本発表では、①手段のデにあたる前置詞選択を観察し、②「そば」のbyが、「そば」との近隣性が全く認められない(a)受動態動作主マーカ、(b)手段、(c)経由、において使われるのはどういうメカニズムによるのかを検討し、手段のbyに課せられる抽象化制約はそのメカニズムによるものであることを論じる。

大会関係役員一覧

支部長	内 田 恵 (静岡大学)
副支部長	吉 田 江依子 (名古屋工業大学)
支部選出評議員	内 田 恵 (静岡大学)
支部代表理事	山 本 卓 (金沢大学)
事務局長	丸 山 修 (静岡大学)
事務局長補佐	横 越 梓 (名古屋工業大学)
書記	小 町 将 之 (静岡大学)
監事	鈴 木 達 也 (南山大学)

大会準備委員 (◎委員長 ○副委員長)

英文学

- 楚 輪 松 人 (金城学院大学)
- ◎山 本 卓 (金沢大学)

米文学

- 和 泉 邦 子 (金沢大学)
- 川 村 亜 樹 (愛知大学)
- 永 瀬 美智子 (愛知大学)

英語学

- 大 村 光 弘 (静岡大学)
- 中 村 太 一 (福井大学)
- 吉 田 江依子 (名古屋工業大学)

開催校大会準備委員

- 吉 田 江依子
- 横 越 梓
- 大 貫 徹